



島の東端付近から多度津方面を望む

粟

島で船を乗り換えて、志々島行ききの甲板に立つと、海風が気持ちよく吹き抜けていきます。志々島はすぐ近くに見えています。粟島港から30分の船旅。小さな船は観光客を運ぶだけでなく島の人たちの足でもあり、船の上でちょっとした交流が生まれることも。

粟島から乗り合わせた観光客風の3人組に声を掛けてみると、皆さん瀬戸内国際芸術祭のボランティアアサポーター・こえび隊のメンバーで、柳生笑子さん（宇多津町）、大平崇代さん（高松市）、大西三枝子さん（丸亀市）。オフを利用して島巡りに来たのだとか。せっかくなので、途中まで一緒にすることにしました。

志々島港に降り立って最初に目指すのは、樹齢1200年ともいわれる島のシンボル・大楠。港から集落の間の



樹高40メートル、枝張り50メートルのダイナミックな大楠

細い道を抜けて城山へ、振り向くと港の風景が眼下に広がります。峠を越えて今度はちょっと急な下り坂へ。下りきってふと顔を上げると、一目でそれと分かる巨大なクスノキ！葉や幹が明るい日差しを受けて輝き、なんとも神秘的。柳生さんたちも「すごい生命力！」と思わずため息。大楠の前には島の北側の眺めが少し開けており、海も見えます。

ゆったりと時が流れる

小さな島の大きな景色

三豊市の宮の下港から約20分、須田港からなら粟島経由で約45分。周囲約4kmの小さな島には、さまざまな出会いが待っています。



エリア 志々島

辻へ。360度の眺望が楽しめるビュースポットで、気候のいい時期ならお弁当を広げるにもぴったり。15分ほどの比較的気軽なハイキングコースですが、足元には十分気を付けて。

港に戻って島の東側へ海沿いの道をたどっていくと、ちょうど引き潮でこつこつとした岩がちよつと面白い眺めをつくりだしていました（右上写真）。潮のタイミングを計れば、島の北側をぐるっと回る磯歩きも楽しむことができます。

やがて訪れる夕暮れ時。帰りの船を待つ間、夕陽にきらめく港の風景が、いつまでも心に残りました。



横尾の辻から粟島方面を望む



山頭神社近くからの夕日

ウバユリの咲く季節にぜひ島へ

高島孝子さん



島の名物「茶がゆ」

マーガレットやキンセンカ、マリーゴールド。志々島は少し前まで、色とりどりの花が山肌を彩る「花の島」として知られていました。「ここは冬も霜が下りんで、ぬくいからな。花づくりに向いとる」という高島孝子さんは、生まれも育ちも志々島。花を育てて50年の「花づくり名人」。今や島で唯一の花き農家です。

数々の映画のロケ地にもなった志々島で、多くの名監督や女優たちを迎えてきた「島のお母さん」でもあり、いつも振る舞うという島の名物「茶がゆ」は絶品！



高島さん

「瀬戸内国際芸術祭で島に来る人も増えたな。みんな大楠を見に来よるね。お薦めはウバユリの季節。大楠の下面に白いユリが咲いて、ほんまにきれい。ほんの短い間しか見られん特別な景色」と高島さん。三豊市から大楠の清掃活動に来るボランティアの人たちにも、ウバユリを残すようお願いしているのだとか。「なんもないけど、空気と景色はええとこ。いっぺん来てみて」と語るチャーミングな笑顔が印象的でした。